2015 年「平和と核兵器のない世界を祈る」ミサ
説教
オスカー・カントゥ司教

わたしにとりまして、この歴史的なカテドラルで、また長崎を壊滅させた原爆投下から 70 年目を迎えるこの日、皆様とここに共にいることは、大変光栄なことです。

今日の聖書の朗読箇所を黙想したとき、聖パウロがエフェソの信徒に向けた言葉が特にこころに響きました。彼は、キリストに従う人たちに対して、一つになるように、憤りや怒りを捨てて、互いに親切にし、赦し合うように、そして「神に倣う者となり」、愛によって歩むように、と勧めています。これこそ、平和を探し求めるための力強いメッセージです。

これは、不信と怒りと憎しみに満ちた今の世界がとても必要としているメッセージです。なぜなら、そのような不信や怒りや憎しみが、紛争や、自衛のためかもしれませんが核兵器を含むあらゆる兵器の獲得競争の火種になっているからです。しかし、そのような道を辿ることは、さらなる疑念と不信を招くだけであり、それは渦を巻くようにどん底に落ちる危険を帯びており、さらに深刻な破壊をもたらす力を秘めています。でもわたしたちは、そのような道から逸れて、主がわたしたちに望まれるように平和を探し求めなければなりません。

昨年 9 月、わたしは聖地へ巡礼の旅をしたとき、ガリラヤ湖を見渡す丘の上に立ちました。そこは、主がわたしたちに「幸い」について教えてくださった場所のすぐ近くでした。イエスは、「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ 5・9）と仰せになりました。

今わたしの周りを見渡すと、皆さんはすべて、核兵器のない世界を託され、ここに集まった、平和を実現する人々、神の子です。わたしは、70 年前に忌まわしい状況の中でいのちが失われたことと、生存している方々の悶々とした苦しみのことに思いを馳せています。この教会の敷地は、信仰者の迫害にもかかわらず何十年もの間カトリックの中心であった最初のカテドラルが実際に破壊された場所です。カトリック信者が 1597 年に十字架刑に処され、「日本二十六聖人」となったのは、ここ長崎においてでした。

わたしは、何世紀もの間教会を支えた人々の信仰に奮い立たされています。日本の教会と殉教者たち、そして広島と長崎の人々に対して畏敬の念を抱いています。広島と長崎の人びとは世界に対して、暴力と戦争を放棄し、平和を追求するようにと、一生懸命訴えてきたからです。

何十年にもわたって、何人もの教皇様は広島と長崎で起こった悲劇について語り、そのような破壊を避けるよう、世界に求めてきました。2009 年（10 月）、ベネディクト十六世教皇様は、（お告げの祈りに先立つ話の中で）、（広島と長崎の）生き残りの被爆者のグループに挨拶を送り、「世界が決して二度とそのような無垢な人のいのちを破壊することを示すようなことのないように[1]」祈りました。

フランシスコ教皇様は、2014 年 11 月に、広島と長崎で起こったことについて質問された時、「人類はそこから何も学びませんでした。 ....　人類はそのようなことを行って、多くの積極的な利用に供される核エネルギーを発見しましたが、被造物と人類を破壊するためにも用いました」とおっしゃいました。

---

[1] Pope Benedict XVI, Angelus, October 11, 2009, and Homily on Pentecost, May 31, 2009.

アメリカ合衆国の司教団は、原子爆弾が投下された結果、ここで起こった悲劇と向き合い、日本の教会と連帯して、地球規模の核不拡散と軍備縮小を共に弁護します。「平和への挑戦」という 1983 年の司牧書簡の中で、アメリカの司教団は、「わたしたちの国が、1945 年の原子爆弾投下に対する深い悲しみを表明することができるような世論の環境」をつくることを約束しました。「そのように悲しむことなしに、将来核兵器を一切使用しないための方法を見つけ出す可能性はないからです[2]」。

日本のカトリック司教団のメッセージ「戦後 70 年『平和を実現する人は幸い　――　今こそ武力によらない平和を』」は以上のことをすべて述べています。平和のために働く人々は、平和を維持するために、武器、ましてや核兵器に頼ることはできません。世界中の教会が繰り返し断言してきたように、大量破壊兵器のようなものの使用を含めて、軍事力だけでは、紛争を解決することはできません。むしろ紛争のもとになっている原因こそ検討されるべきです。

聖ヨハネ・パウロ二世教皇様は、広島での「平和アピール」の中で「過去をふり返ることは将来に対する責任を担うことです」と言われました。教皇様は、各国の指導者たちに、次のように求められました。「正義のもとでの平和を誓おうではありませんか。今、この時点で、紛争解決の手段としての戦争は、許されるべきではないというかたい決意をしようではありませんか。人類同胞に向って、軍備縮小とすべての核兵器の破棄とを約束しようではありませんか。暴力と憎しみにかえて、信頼と思いやりを持とうではありませんか[3]」と。

わたしたちは日本の教会が抱いている危惧の念を分かち合います。対話や、極端に貧しい人々、社会の周辺で生きている人々、過激派の募集に非常にかかりやすい人々を助けるプログラムの積み重ねは十分に強調されず、あまりにも軍事力による問題解決が強調されているからです。人間の尊厳といのち、人権、不正や貧困によって苦しめられている世界における真の発展、それらに対する尊敬の念を広めるために一緒に働きましょう。

原爆投下 70 年というこの荘重な記念日に、すべての国の政府が、安全保障のために核兵器に依存することを止め、このテロの時代に核の材料を安全に確保するために働くようにと祈る、皆さんの熱心な祈りにわたしも加わります。わたしは、わたしたちの国民が一つの地球規模の家族として一つになって全面戦争の行為を排除するようにと祈ります。これは簡単ではないとわかっています。しかし、今日の第一朗読の中で、主の天使がエリヤにどのように命令したかを思い出してください。「起きて食べよ。この旅は長く、あなたには耐えがたいからだ。」（列王記上 19・7）正義と平和の長い旅のために「天から降ってきたパン」、イエス・キリストによってわたしたちが強められますように。

同じように、いのちのパンであり平和の君であるご自身を差し出してくださるキリストを抱き迎えるために、主が日本の教会とアメリカ合衆国の教会を、連帯と委託の精神で強めてくださいますように。そうすれば、わたしたちは、この世にあって希望と平和の使者となることができるでしょう。

---

[2] U.S. Catholic Bishops, *The Challenge of Peace*, 1983, no. 302

[3] 教皇ヨハネ・パウロ二世『「広島平和アピール」1981』日本カトリック司教協議会　社会司教委員会・編、2011 年、8 頁。